

## 論文

# 経済学部英語圏短期留学プログラムにおける スピーキング・テストの実施とその結果報告

清水 裕子・桐村 亮  
野 澤 健

## 要 旨

経済学部が実施している短期留学プログラムの英語力向上効果について、事前・事後に実施したスピーキング・テストの結果、および質問紙調査の結果から考察する。テスト結果においては、英語スピーキング能力全般に有意な伸びが観察されたが、特に、下位能力として「文章構文」と「語彙」に顕著な伸びが見られた。一方で、質問紙調査においては、プログラム参加者自身は、文章構造面、語彙面の伸びを実感しておらず、実際のテスト結果と学習者の実感が必ずしも一致しないことが示された。このようなスピーキング・テストの分析は、今後経済学部が技能統合型の英語教育プログラムを設計する上で示唆を与えるものである。

## キーワード

経済学部生、英語圏短期留学プログラム、英語スピーキング・テスト

## 1. はじめに

立命館大学経済学部では、基礎学力を確実に備えた学生を育成すると共に、学びの国際化を柱に、経済学を体系的かつ実践的に学び、将来の経済社会を担う人材の養成を目標にカリキュラムを展開している。その一環として、2006年度の国際経済学科の創設を機に、全学の海外留学プログラムの参加を促すと共に、「事前研修」、「留学先での研修またはフィールドワーク」、「事後研修」から成る経済学部独自の海外教育プログラムを開発・実施している。これにより、多くの学生が海外経験を重ね、国際感覚を磨くための一助としてきている。

現段階では、ホームステイ等を通じて異文化体験をしながら経済学の専門を学ぶ「海外アカデミック・プログラム」と、学部で学んだ知識を海外で実践する「海外フィールドワーク・プログラム」が準備されている（表1参照）。

本稿では、英語圏への短期留学プログラムである3つのプログラム（表1内の\*参照）を取り上げる。これらのプログラムに参加する学生を対象に、短期留学を通じて、産出能力のひとつで

表 1 経済学部海外留学プログラム

	留学機関	期間	定員
海外アカデミック・プログラム	ホーソン-メルボルン英語学校 (オーストラリア) *	5 週間	20
	ブリティッシュコロンビア大学 (カナダ) *	4 週間	20
	マッセイ大学 (ニュージーランド) *	4 週間	20
	大連外国語学院漢学院 (中国)	4 週間	20
	大連外国語学院漢学院 (中国)	半年・1 年	若干名
	ブダペスト商科大学 (ハンガリー)	1 学期間	若干名
海外フィールドワーク・プログラム	タイ国立開発行政研究院 (タイ)	13 日間	15

\* 英語圏への短期留学プログラム

あるスピーキング能力の変化を把握し、次の学習への動機を与えることを目的に、2012 年度から事前・事後研修時に英語スピーキング・テストを導入した。そのテスト結果の分析および事後研修時に実施した留学経験に関する質問紙調査の結果をもとに、短期留学プログラムの効果について報告する。

## 2. 経済学部の英語圏短期留学プログラムとスピーキング・テストの実施

現在、経済学部の英語圏への短期留学プログラムでは、毎年 3 機関へ合計約 60 名を派遣している。参加者の動機としては、専門科目の英語での学びやホームステイおよび現地での様々な活動を通じての異文化体験や英語力の向上があげられる。英語力については、帰国後の事後研修のプレゼンテーション等の様子を観察すると、明らかに発話能力の向上とコミュニケーションを図ろうとする態度に変化が見られるが、参加者自身は、数ヵ月後に TOEIC 等の受験結果を手にして初めてその変化を実感するケースも多い。

留学プログラムを設計する側にとっても、また参加する学生側にとっても、1 カ月前後の海外留学で、実際に英語力にどの程度の変化が現れるかどうかは重要な関心事である。2006 年度に経済学部が開発したブリティッシュコロンビア大学での留学プログラムでは、第 1 回参加者 22 名を対象に事前・事後に英語テスト<sup>1)</sup>を実施し、短期留学の効果を検証したが、そのテストでは音声面についてはリスニング能力のみを測定していた。2012 年度から本学の「教育の質向上予算」を受け、スピーキング・テストを実施することが可能になった。これにより、既存の英語テストでは測定できない能力を測定し、短期留学の効果を数値情報として得ることにより、参加者の帰国後の学習へのモチベーション向上につなげると共に、短期留学の参加を検討する学生への情報としても提供していきたい。

### 2.1 スピーキング・テストについて

2012 年度に開催された日本テスト学会第 10 回大会では、「パフォーマンス評価の未来」というテーマのもとに、面接試験の評価や論文の自動採点、体操競技の採点、看護系の実技評価、医学系の臨床能力評価などについての企画や発表があり、各分野でパフォーマンス・テストが注目

されていることがわかる。言語教育におけるパフォーマンス・テスト、つまり産出能力であるスピーキングやライティングの測定と評価も、近年、その重要性が注目されている。日本で受験可能な英語テストにおいても、その下位テストにスピーキングやライティングの測定が含まれているものが増えてきている。例えば、米国のETSの開発によるTOEIC® Speaking and Writing TestsやTOEFL iBT®、プリティッシュ・カウンシル、IDP社、ケンブリッジ大学ESOLが共同運営するIELTS (the International English Language Testing System)、イギリス・ケンブリッジ大学ESOLと日本英語検定協会が提携して開発したBULATS (Business Language Testing Service : ブラッツ)、国際英検G-TELPスピーキングテスト・ライティングテストなどがある。また、長い歴史をもつ日本英語検定協会の「英検」は、面接試験の形でスピーキング能力の測定を行っている。

教育現場におけるスピーキング・テストの実証研究も増えてきており、コミュニケーション能力を重視する英語教育の展開においては、測定面でもスピーキング・テストは重要視されてきている。その一方で、測定方法や実施環境の問題、妥当性や信頼性に対する懸念、コスト面などを考えると、上述のような既存のテストを使用するにしても、あるいは教師が独自に作成したテストを実施するにしても、英語プログラムの中でスピーキング・テストが導入されていくには、まだまだ時間が必要であろう。しかし、経済学部の今後のカリキュラム展開の方向性を考えると、学習者のスピーキング能力に関する客観的な情報を得ておくことは重要であり、経済学部の一部の学生の情報ではあるが、スピーキング能力に関する情報を累積していくことで、カリキュラム設計にも役立てていきたい。

## 2.2 Versantの導入について

短期留学プログラムに参加した経済学部生のスピーキング能力の検証では、対象となる学生の英語力の測定に適していることはもちろんであるが、実施しやすく、比較的安価(1受験につき2625円)であることから、Pearson社によって開発されたVersant (ヴァーサント)を採用した。また、実行性に加えて、本テストの信頼性についてもいくつかの報告<sup>2)</sup>がされており、テスト導入の判断の情報として活用した。なお、本テストの実施に先立ち、2007年2月のプリティッシュコロビア大学短期留学プログラムに参加した3名の学生に対してパイロット・テストを試みている。少ない受験者ではあったが、受験者側の感想などを聞きとることで、表面的妥当性や内容的妥当性についても検討できたことが、今回のVersantの活用につながったとも言えよう。

## 2.3 テストの構成

Versantの構成概念については、Versant™ English Test: Test Design and Validation Research (2008)において次のように説明されている。

The Versant English Test measures facility in spoken English – that is, the ability to understand spoken English on everyday topics and to respond appropriately at a native-like conversational pace in intelligible English (p7).

本テストの設計に際しては、日常的に使用される英語に対して、流暢さや即時性などを含む受験者のリスニングおよびスピーキング・スキルを測定することに焦点が当てられている (p9)。

なお、下位テストの構成は表2に示すとおりである。

本テストはコンピュータを通じて受験するが、受験者毎に Test Identification Number が割り振られ、それぞれに異なったテスト問題（A4 サイズ1枚程度）が発行される。受験者は、その問題を見ながら、ヘッドセットとマイクロフォンを通じて解答していく。受験者の応答時間に差はあるが、15分前後ですべてのパートを終了することができ、テスト結果は、受験直後に Score Report として提示される。

表2 Versantのテスト項目

パート	テスト項目		項目数
A	音読	12個のセンテンスが提示されていて、指示された番号の英文を音読する。	8問
B	復唱	聞こえてくるセンテンスを復唱する。	16問
C	質問への応答	聞こえてくる質問に対し、簡潔に答える。	24問
D	文の構築	ランダムに聞こえてくる語群を適切な順に並べ変えて文章にする。	10問
E	話の要約	簡単なストーリーを聴き、30秒以内にストーリーの状況・登場人物・行動・結末を含め、英語で要約する。	3問
F	自由回答	家族の生活や個人的な選択について、の質問に対して40秒以内に英語で回答する。	2問

#### 2.4 受験者への結果のフィードバック

Versant の Score Report では、表3に示すように、「総合」点に加えて「文章構文」「語彙」「流暢さ」「発音」の4つの下位項目の得点と説明が表示される。

表3 Score Reportの得点情報 (<http://www.versant.co.jp/kekka/> より抜粋)

スキル	スコア	スコアの判定基準
総合	20-80	総合スコアは4つの能力別スコアの加重平均によって判定
文章構文	20-80	構文力や単語、句、節の使用習熟度により判定
語彙	20-80	英単語の形式と意味の理解、関連する発言におけるそれらの用法の熟達度により判定
流暢さ	20-80	文章の組立て、読み、反復の際のリズムのとり方の能力判定
発音	20-80	日常英単語の音韻構造の知識により判定

その他にも言語能力の詳細情報として「リスニング」「発話能力」「対話能力」「言語特性」「方略能力と技能」の分析と、今後の学習方法のアドバイスが記述されている。また、その他の英語テストやレベルとの関係性を示す指標としてヨーロッパ言語共通参照枠組、TOEFL iBT® スピーキングスコアおよび総合点、TOEIC® の総合点の得点範囲も表示される。このように、受験者が自らの英語能力を判断するのに十分な情報が提供されているといえる。なお、Score Report は多くの言語で提示可能で、日本語版も提供されている。

### 3. 2012年度のスピーキング・テストおよび質問紙調査の実施と分析結果

#### 3.1 テストの実施

経済学部が提供している英語圏への短期留学の3つのプログラムの内、ひとつは夏季休暇中、残りは春季休暇中に実施されるものである。参加者は主に1回生と2回生であるが、プログラムによっては3回生の参加もみられる。2012年度に参加した学生については、2012年度6月のTOEIC®IP 団体受験では平均点が539.25点（標準偏差90.59）で、国際ビジネスコミュニケーション協会が示すProficiency ScaleのCレベル（470点以上）に達している者が大半であった。

2012年度には、立命館大学より「教育の質向上予算」を得ることができ、各プログラムの事前・事後研修の一環としてVersantを実施した。プログラムによって、実施した日時は異なるが、基本的には、出発2週間以内に事前テストを、帰国後2週間以内に事後テストを行った。なお、BKC情報語学演習室のコンピュータを使用し、オンラインによる実施を前提としていたが、2012年夏季実施プログラムの事前テストについては、システム上の対応が間に合わなかったため、携帯電話での実施となり、19名中3名分の音声データが認識できないというトラブルが生じた。その後、2012年11月の段階で、情報基盤課の協力のもとに、情報教室での一斉実施が可能であることを確認し、それ以降のプログラムについては、オンラインによる速やかな実施が可能となった。なお、春季に実施した2つのプログラムでは、事後テストの際に質問紙調査を行い、「英語での生活やコミュニケーションで困難に感じたこと」、「留学中に感じた自分の英語力について」、「留学で得たもの」、および「実感している英語力の変化」について意見を得ている。（資料参照）

#### 3.2 スピーキング・テストの分析結果

事前・事後のVersantの「総合」得点の記述統計を表4に示した。平均点が34.68から38.13に上がっていた。両テストを受験した者のデータ（46名）をもとに $t$ 検定を行ったところ、事後の伸びは統計的に有意であることが観察され、短期留学の音声面での学習効果が検証された。（ $t(45) = 6.459, p < .01, d = .72$ ）

表4 Versantの「総合」の基本統計量

	人数	最小値	最大値	平均値	中央値	標準偏差
事前テスト	53	24.00	43.00	34.68	35.00	4.07
事後テスト	52	26.00	51.00	38.13	39.00	5.21

次に、Versantが示すスピーキングの4つの下位能力の結果を分析したところ、表5の平均値からもわかるように、「文章構文」では4.82、「語彙」では4.46、「流暢さ」では2.84、「発音」では.91の伸びが見られ、特に「文章構文」と「語彙」の伸びが顕著だったことがわかる。また、図1が示すように、すべての下位能力で中央値が伸びており、最大値が50点を超える者もでている。

「総合」と同様に、4つの下位能力についても $t$ 検定を行ったところ、「文章構文」「語彙」「流

暢さ」の3つの下位能力について、統計的に有意な伸びが観察された（文章構文： $t(45)=5.393, p<.01, d=.77$ ；語彙： $t(45)=4.548, p<.01, d=.70$ ；流暢さ： $t(45)=3.685, p<.01, d=.42$ ）。また、「発音」については、有意傾向でその伸びが観察された（ $t(45)=1.780, p=.082, d=.20$ ）。

表5 4つの下位能力の基本統計量

		人数	最小値	最大値	平均値	差	中央値	標準偏差
文章構文	事前	53	20	49	37.06		37.00	6.11
	事後	52	24	55	41.88	+4.82	43.00	6.37
語彙	事前	53	21	46	35.66		36.00	5.86
	事後	52	24	56	40.12	+4.46	40.50	6.79
流暢さ	事前	53	21	49	32.26		32.00	6.43
	事後	52	22	50	35.10	+2.84	34.50	6.91
発音	事前	53	28	46	34.09		33.00	4.12
	事後	52	28	52	35.00	+ .91	34.00	4.82

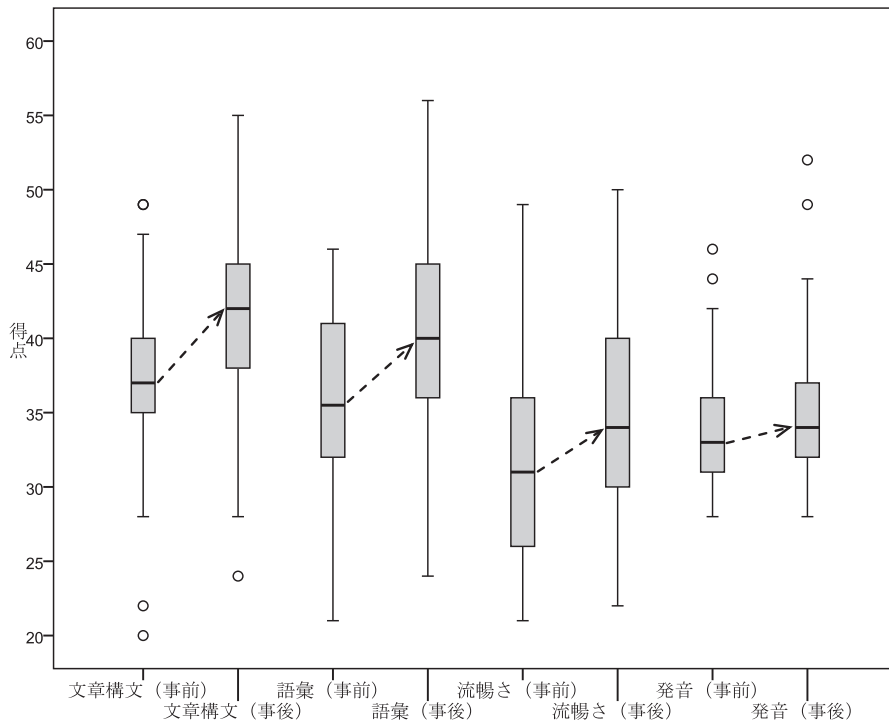


図1 4つの下位能力の事前・事後の比較

### 3.3 スピーキング・テストの分析結果：CEFR との関連から

CEFR (Common European Framework of Reference for Languages：ヨーロッパ言語共通参照枠) が日本の言語教育にも少なからぬ影響を与えてきている。ETS (2010) が TOEIC® と CEFR と



の関連を報告しているので、その指標に則して、留学前（2012年6月）と留学後（2013年6月）の両時期に、学内で実施された TOEIC®IP を受験した 28 名の結果分析を試みた。TOEIC® の合計点（990 点満点）においては 5%水準で、またリスニング・セクション（495 点満点）では 1%水準で有意な伸びを示していた（合計点： $t(27) = 2.54, p < .05, d = .39$ 、リスニング・セクション =  $2.76(27), p < .01, d = .32$ ）。留学後の合計点の平均値は 593.93（標準偏差 97.34）であり、ETS（2010）が示す情報を参照する限りでは、B1 レベルに位置することになる。

次に Versant の Score Report で提示された CEFR のレベルの分布を調べてみると、表 6 のようになった。リスニングとリーディングから構成される TOEIC® においては、B1 レベルに達している者が中心といえる結果であったが、Versant の得点では留学後に有意な伸びが観察できたものの、CEFR の指標では 34 名（65%）が A2 レベルであり、B1 レベルに達しているとみなされた者は 3 名のみであった。つまり、TOEIC® で測定しているような受容技能に比べて、産出技能は低いと考えられる。

ただし、事前テストの際には、A1 レベル以下の者が 2 名存在し、A1 レベルが 28 名（52.8%）、A2 レベルが 23 名（43.4%）で、B1 レベルの者はいなかったが、事後には A1 レベル以下の者がなくなり、B1 レベルに達した者が 3 名でてきた。また、事前と事後の結果をウィルコクソンの符号付き順位検定で分析したところ、有意な伸びが観察されたことから（ $z = -3.84, p.01, r = .40$ ）、スピーキング能力の伸長において一定の効果がみられたといえる。

表 6 Versant による CEFR レベル区分と分布

CEFR の Level	Basic User			Independent User		Proficient User	
	<A1	A1	A2	B1	B2	C1	C2
Versant の 得点範囲	20-25	26-35	36-46	47-57	58-68	69-78	79-80
人数	事前	2	28	23	0	0	0
	事後	0	15	34	3	0	0

### 3.4 質問紙調査の結果

#### 3.4.1 音声面の向上に対する参加者の実感

3.2 に示した分析結果から、短期留学プログラムを通じてのスピーキング能力の向上が観察できたが、参加者自身その変化を実感しているのであろうか。それを知るために、春季に実施した 2 つのプログラムの事後研修において、Versant を受験する直前に、本テストで測定される 5 つの能力（「総合」と 4 つの下位能力）に対して、「これから Versant で Speaking の変化を測定しますが、その前に、自分で実感している英語力の変化を < -2 >（悪くなったと思う）～ < +2 >（良くなったと思う）で評価してみてください。」という質問を与え、回答してもらった。

その結果をまとめたのが図 2 である。回答した 34 名中、変化を感じていない 3 名を除く 31 名が何らかの向上を感じ取っている。中でも、「流暢さ」や「発音」での伸びを実感している者が圧倒的に多く、「流暢さ」については、「良くなった」4 名、「どちらかと言えば良くなった」23 名、また「発音」については「良くなった」4 名、「どちらかと言えば良くなった」21 名と、スピー

キング能力の向上を感じている者が7割以上となった。一方、Versantの数値の上では効果が出ていた「文章構文」については26名(76%)の者が、また「語彙」については56%の者が「変化なし」と感じており、中には「どちらかと言えば悪くなった」と感じている者もいたが、伸びを自覚していない下位能力が、実際には向上していたことを数値情報として得ることで、さらなる学習の指標となり得る。

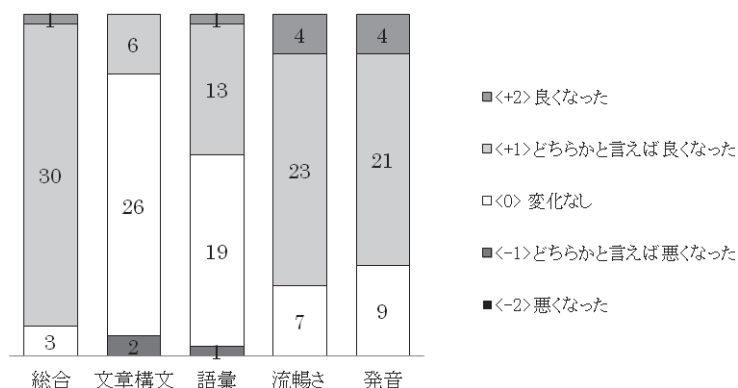


図2 短期留学プログラム参加者のスピーキングの能力の変化に対する実感 (N = 34)  
(グラフ内の数字は人数)

### 3.4.2 自分の英語力等に関する自由記述

質問紙調査の中で「留学中に、英語での生活やコミュニケーションで困難に感じたこと」と「自分の英語力についてどう感じたか」の2点について、自由記述での回答を求めた。多くの参加者は、表現力の乏しさ、言いたいことが伝わらないこと、即座に反応できないこと等、コミュニケーションが思うようにできないもどかしさを痛感していたようである。特に語彙力の不足を実感したという回答が多いが、これは、Versantにおいて「語彙」面での伸びが顕著だった点を考えると興味深い。これまで身につけてきた受動語彙が、話すことを多く求められる留學生活の中で、能動語彙として活性化していく過程とも考えられる。留學によって、必要性や能力不足を強く意識した側面が、結果的に伸びにつながっている点は重要である。また、コミュニケーションに対して自信がない、勇気がないといった情意面での問題や、他国からの留學生とのコミュニケーション力の差に驚くなど、現地で様々な「カルチャー・ショック」を体験しながらも、徐々に、積極性を身につけ、話して通じることの楽しさを知ることができたようである。こうした成果はVersant等で直接的に測ることはできない部分ではあるが、更なる英語学習への動機につながる記述もあり、当該留學プログラムがその目的を果たしているとして評価できる。

### 3.4.3 留學で得たもの

質問紙調査で「留學で得たものは何ですか。当てはまるものすべてに○をつけ、その内、上位3つに◎をつけてください。」という質問を与え<sup>3)</sup>、図3のような結果を得た。



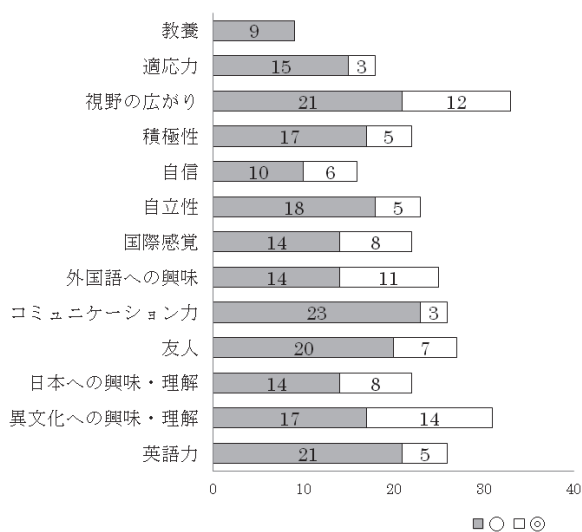


図3 短期留学で得たもの (n = 35) (グラフ内の数字は人数)

経済学部の短期留学プログラムに参加した学生は、限られた時間の中で経済学の専門の講義を受けたり、プレゼンテーションを行ったり、またホームステイを通じて様々な新しい経験を重ねることになる。その経験で得られるものとして、コミュニケーション力や英語力、国際感覚があげられていることも、言語教育に携わる者としては喜ばしいことであるが、それと共に、「視野の広がり」(94.2%)、「異文化への興味・理解」(88.6%)、学年卒を超えた友人の形成(77.1%)などが留学で得られたこととして上位を占めていることは、留学プログラムの目的を達成していると評価できよう。

#### 4. さいごに

本報告は、2012年度に経済学部が実施した留学プログラムに参加した学生を対象に、データを分析したものである。これをもとに、今後実施される英語圏への留学プログラムについても、引き続き調査・分析を行う必要がある。特に、参加学年やプログラム毎の効果の違い、事前の英語力を変数とした分析等、より詳細な分析を行い、質問紙調査による学生の意識調査とともに、留学プログラムの効果を検証していく。今回、スピーキング・テストとして採用した Versant では、一定の効果測定の結果を得たが、他にも現在入手可能なスピーキング関連テストの導入可能性も視野に入れつつ、将来的には、留学プログラム参加者だけでなく、学部の英語プログラム全体を対象として、産出技能向上を測定する手段を検討したい。経済学部では、更なるグローバル化を見据えた、大規模な英語カリキュラム改革を控えているが、産出技能の強化もその課題の一つである。今回、システム上の問題や音声データが認識できないというトラブルが生じたことも考慮すると、スピーキング・テストの本格的導入には、従来のペーパーベースのテスト以上に事前準備・対策が必要である。また、こうしたテストが、カリキュラムの目的、学習者の実態やニーズ、および実際の学習内容とかけ離れた評価手段とならないよう、カリキュラムにおけるテ

ストの位置づけを明確にした上で、引き続き総合的にテスト導入を検討していきたい。

## 謝辞

「教育の質向上予算」を受けることで、今回の調査研究が可能になった。予算支援をいただいた立命館大学教学部に感謝する。また、テスト実施は、情報基盤課の協力なくしては実現できなかった。この場を借りて感謝の意を記したい。

## 注

- 1) 英語テストとして CASEC を使用。CASEC (Computerized Assessment System for English Communication) は、(財) 日本英語検定協会が基礎開発し、現在、(株) 教育測定研究所が開発・運営しているインターネット上で受験できる英語コミュニケーション能力判定テスト。
- 2) Versant™ English Test: Test Design and Validation Research (2008) では、基本情報として、603 名の英語学習者を対象にした調査で、平均点 43 点、標準偏差 13、総合得点の測定誤差は 2.9 と報告されている。また、コンピュータによる採点と人による採点の間には非常に高い相関があることや、TOEFL iBT® などの他のテストとの高い相関も示されている。(pp18-21)。
- 3) 質問項目については日本学生支援機構 (2012) が実施したアンケート調査を参考にした。

## 参考文献

- Educational Testing Service, "Mapping the TOEIC® and TOEIC Bridge™ Tests on the Common European Framework of Reference for Languages", Educational Testing Service, 2010, ([http://www.ets.org/s/toEIC/pdf/toEIC\\_cef\\_mapping\\_flyer.pdf](http://www.ets.org/s/toEIC/pdf/toEIC_cef_mapping_flyer.pdf), 2013 年 8 月 1 日)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会『TOEIC® プログラム Data & Analysis 2012』国際ビジネスコミュニケーション協会、2013。
- Pearson Education Inc., "Versant™ English Test: Test Design and Validation Research", Pearson Education Inc., 2008, ([http://www.versant.jp/pdf/versantforenglish\\_technicalmanual\\_v6.pdf](http://www.versant.jp/pdf/versantforenglish_technicalmanual_v6.pdf), 2013 年 8 月 1 日)
- Pearson Education Inc., "Versant™ English Test: Can Do Guide", Pearson Education Inc., 2008, <http://www.versant.jp/pdf/cando-versant2.pdf>, 2013 年 8 月 1 日)
- 日本学生支援機構『平成 23 年度 海外留学経験者追跡調査報告書—海外留学に関するアンケート』日本学生支援機構、2012、参照日：2012 年 12 月 1 日、参照先：[http://www.jasso.go.jp/study\\_a/enquete2012.html](http://www.jasso.go.jp/study_a/enquete2012.html)

資料（留学後に用いた質問紙調査の項目）

1. 留学中に、英語での生活やコミュニケーションで困難に感じたことを列挙してください。

例) 質問したくても、英語でうまく質問できなかった。 / 言っていることを理解してもらえなかった。

2. 留学中に、自分の英語力についてどう感じましたか。

例) 予想以上に通じたので驚いた。 / 簡単なことが表現しにくかった。

3. 留学で得たものは何ですか。当てはまるものすべてに○をつけ、その内、上位3つに◎をつけてください。

- ( ) 英語力      ( ) 異文化に対する理解・興味      ( ) 日本に対する理解・興味  
 ( ) 友人      ( ) コミュニケーション力      ( ) 外国語への興味  
 ( ) 国際感覚      ( ) 自立性・独立心      ( ) 自信  
 ( ) 積極的な態度      ( ) 視野が広がる      ( ) 適応力  
 ( ) 教養      ( ) その他：\_\_\_\_\_

4. これから VERSANT で Speaking の変化を測定しますが、その前に、自分で実感している英語力の変化を < -2 > (悪くなったと思う) ~ < +2 > (良くなったと思う) で評価してみてください。

	どちらかと言えば			どちらかと言えば	
	 悪くなった	悪くなった	変化なし	良くなった	 良くなった
	-2	-1	0	+1	+2
総合 (Overall Score)	-2	-1	0	+1	+2
文章構文 (Sentence Mastery)	-2	-1	0	+1	+2
語彙 (Vocabulary)	-2	-1	0	+1	+2
流暢さ (Fluency)	-2	-1	0	+1	+2
発音 (Pronunciation)	-2	-1	0	+1	+2

## Effects of Short-term Study Abroad Programs for Economics Students: Based on Analysis of Speaking Tests

SHIMIZU Yuko (Professor, College of Economics, Ritsumeikan University)

KIRIMURA Ryo (Associate Professor, College of Economics, Ritsumeikan University)

NOZAWA Takeshi (Professor, College of Economics, Ritsumeikan University)

### **Abstract**

In an attempt to evaluate the effects of the short-term study abroad programs organized by the College of Economics, the present report examines the results of the speaking test the participants took before and after the programs, and also discusses the results of a questionnaire study. The analysis of the test indicated a significant increase in their English speaking abilities, particularly in such sub-categories as sentence construction and vocabulary. The improvements in those categories, however, were not properly recognized by the students themselves, as was shown in the questionnaire study. This report with a preliminary focus on students' speaking abilities provides practical implications in redesigning the College's English program, which aims to integratively address a mix of language and other skills.

### **Keywords**

Economics Students, Short-term Study Abroad Programs, English Speaking Test